『日本文芸論稿』　総目録

■第４４号　　令和３年３月発行

笠間　はるな　　「浮世」に降る雪
—樋口一葉「雪の日」論
廣瀬　航也　　雑誌『方寸』における都市の表象
—「河岸の巻」を中心に—
※東北大学文芸談話会　令和二年度　研究発表題目

■第４３号　　令和２年３月発行

越田　健介　　『我が身にたどる姫君』「音羽山」考
—「音羽山」に導かれる「音」をめぐって—
廣瀬　航也　　水上瀧太郎「山の手の子」論
—追憶文学における都市の経験と想像力—
※東北大学文芸談話会　平成三十一（令和元）年度　研究発表題目

■第４１・４２合併号　　平成３１年３月発行

翁　筱青　　『源氏物語』「ほのか」な琴の音色と末摘花の人生
—常陸宮との父子関係を視座にして—
菊地　仁美　　泉鏡花「胡蝶之曲」論
—明治後期における鏡花の小説言語の問題として
吉田　宇蘭　　千葉省三「虎ちゃんの日記」論
—日記体の機能に着目して—

■第４０号　　平成２９年３月発行

木戸浦　豊和　　夏目漱石における「趣味（テイスト）」の問題
—価値判断の基盤としての「感情」—
阿部　愛美　　宮沢賢治「カイロ団長」論
—カイロ団の体験—

■第３８・３９合併号　　平成２８年３月発行

小澤　恵里奈　　『枕草子』六段「大進生昌が家に」における中宮定子像
—「宮司」と女房の交流に介入する后—
笠間　はるな　　樋口一葉「わかれ道」論
—一葉テクストにおける「独白」と「会話」—

東北大学附属図書館狩野文庫蔵『紫日記』翻刻

河内　聡子　　渡邉　美希　　本多　遥　　百井　順子

笠間　はるな　　小澤　恵里奈　　滝沢　美子

※東北大学文芸談話会　平成二十六・二十七年度　研究発表題目

■第３７号　　平成２６年３月発行

大木　葉子　　「手袋を買ひに」論 ―同時代との交差を視座に―

渡邉　美希　　『枕草子』「心にくきもの」章段考

―「聴くもの」から「見るもの」へ―

※東北大学文芸談話会　平成二十五年度　研究発表題目

■第３６号　　平成２５年３月発行

大木　葉子　　原抱一庵「少年小説 新年」論 ―その固有性の内実について―

河内　聡子　　大原幽学の発見

―「日本的産業組合」の創出と歴史叙述の転換を巡って―

伊澤　亮太　　〈著書紹介〉仁平政人『川端康成の方法

―二〇世紀モダニズムと『日本』言説の構成―』

※東北大学文芸談話会　平成二十三年度・二十四年度　研究発表題目

■第３５号　　平成２４年３月発行

河内　聡子　　昭和前期農村における活字メディアの展開と受容

―産業組合の出版活動を中心に―

木戸浦　豊和　　夏目漱石『文学論』と〈同感　sympathy〉の原理(下)

―「趣味」に概念と「還元的感化」を中心に―

高橋　早苗　　『白露』論 ―「露のあはれ」歌の解釈をめぐって―

※東北大学文芸談話会　平成二十二年度　研究発表題目

■第３４号　　平成２３年１月発行

久保　堅一　　執着する薫 ―「わがもの」「おのがもの」に着目して―

河内　聡子　　『家の光』の普及に関する一考察　―産青連と反産業組合運動―

高橋　由貴　　「不意の唖」における「通訳」の言葉

―大江健三郎と遅れてきた戦争(上)―

森岡　卓司　　ポスト六〇年代作家としての村上春樹

―「１９７３年のピンボール」試論―

※東北大学文芸談話会　平成二十一年度　研究発表題目

■第３３号　　平成２１年１０月発行

鈴木　早苗　　「末摘花」と「紅の涙」　―末摘花巻における装束の贈答をめぐって―

王　嘉臨　　志賀直哉『大津順吉』論　―「自己語り」の叙述形式をめぐって―

仁平　政人　　無言のまはりを廻る　―川端康成「無言」論―

※東北大学文芸談話会　平成二十年度　研究発表題目

■第３２号　　平成２０年１０月発行

韓　吉子　　樋口一葉「やみ夜」論　―お蘭の「女夜叉の本性」に着目して―

江　明瑾　　〈再現〉のフィクション　―太宰治『右大臣実朝』試論―

仁平　政人　　他者としての「過去」

―戦後の川端康成における〈記憶-忘却〉の方法―

※東北大学文芸談話会　平成十九年度　研究発表題目

■第３１号　　平成１９年３月発行

舩山　博子　　『萬葉集』「所に就きて思ひを発す」歌三首考

韓　吉子　　樋口一葉「雪の日」論　―心の底の何者かをめぐって―

※東北大学文芸談話会　平成十 八年度　研究発表題目

■第３０号　　平成１８年３月発行

寺窪　健志　　「うらうらに照れる春日」と「春日遅々」

―大伴家持『萬葉集』四二九二番歌詩論―

楊　淑容　　芥川龍之介「お富の貞操」論　―共有した時間の記憶―

王　嘉臨　　志賀直哉「范の犯罪」論　―〈気分〉を視座として―

※東北大学文芸談話会　平成十七年度　研究発表題目

■第２９号　　平成１７年３月発行

三浦　一朗　　「女しき」ことと「婬なる」ことのあいだ　―「蛇性の婬」論―

谷島　潤一　　「筋」と「文体」

―夏目漱石「幻影の盾」における「遠羅天釜」の受容―

高橋　由貴　　「監禁」状態の（open）／close

―大江健三郎「偽証の時」における〈公然の秘密〉―

※東北大学文芸談話会　平成十五・十六年度　研究発表題目

■第２８号　　平成１５年１１月発行

野口　哲也　　〈物語〉の道行　――泉鏡花「薬草取」論――

仁平　政人　　川端康成「招魂祭一景」の方法と位相
高橋　秀太郎　　太宰治「女性徒」成立考　――構想メモと『有明淑の日記』（下）――
高橋　由貴　　私的世界の失効
――大江健三郎「他人の足」における「壁の罅」の両義性――
※東北大学文芸談話会　平成十三・十四年度　研究発表題目

■第２７号　　平成１４年１月発行
李　美淑　　「宇治の御堂」と薫と浮舟物語 ―薫の「人形」観を起点として―
三浦　一朗　　『壺菫』考 ―その原拠、作者、史的意義などについて―
高橋　宏宣　　「時」をめぐる物語 ―『虞美人草』の方法―
※東北大学文芸談話会　平成十一・十二年度　研究発表題目

■第２６号　　平成１１年１０月発行
森澤　眞直　　文芸的言説における視点・認識への基礎的考察
李　美淑　　『蜻蛉日記』「柏木の森のした草」考 ―道綱母の自己認識―
三浦　一朗　　影のやうなる人 ―「青頭巾」論―
松浦　史子　　「現在的のもの」から「渝らざる愛」へ
―『それから』における愛の論理―
森岡　卓司　　差出人不明 ―江戸川乱歩「人間椅子」試論―
高橋　秀太郎　　太宰治「惜別」論
※東北大学文芸談話会　平成九・十年度　研究発表題目

■第２５号　　平成１０年３月発行
寺窪　健志　　大伴家持の「暢志」
呉　起燻　　『平家物語』の清盛像造型 ―叛逆者としての位置付け―
空井　伸一　　都市神話としての可能性 ―『根南志具佐』の“根”についての考察―
鄭　旭盛　　有島武郎「かんかん虫」論 ―人間の〈欲〉による「世の中」の論理―
加藤　達彦　　新浪漫主義の視線 ―小川未明「薔薇と巫女」論―
森岡　卓司　　踊る〈塔〉―谷崎潤一郎「幇間」論―
野坂　昭雄　　尾崎翠『第七官界彷徨』論 ―「非正常心理の世界」をめぐって―
※東北大学文芸談話会　平成八年度　研究発表要旨

■第２３・２４合併号　　平成９年２月発行
蔡　惠淑　　『徒然草』の志向するもの ―『枕草子』との対比をめぐる一考察―
森澤　眞直　　言説の一般論理と和歌 ―物語論に触れながら―

半沢　みゆき　　『文正草子』にみる伝承の手法
横山　賢　　室生犀星の詩学 ―俳句と詩と―
山崎　義光　　形式主義論争の争点

■第２２号　　平成７年２月発行
伊藤　幸恵　　『平家物語』における平教経
―門脇家の位置付けと対義経の構図をめぐって―
河野　有時　　芥川龍之介「運」論
申　基東　　「六の宮の姫君」論 ―姫君の自己への執着―
加藤　達彦　　〈破壊〉された物語 ―坂口安吾「風博士」論―
山崎　義光　　「美（イメージ)」の論理 ―三島由紀夫『金閣寺』―

■第２１号　　平成６年２月発行
星山　健　　『落窪物語』の構造
武内　奈美　　帝の御妻をもあやまつ ―「若菜」巻の密通をめぐって―
河野　有時　　明治四十一年秋の紀念
―『一握の砂』「秋風のこころよさに」と「虚白集」―
鄭　旭盛　　有島武郎『カインの末裔』論

■第２０号　　平成４年１１月発行
倉又　幸良　　かぐや姫と李夫人
星山　健　　『落窪物語』における男君の役割
大原　理恵　　『浜松中納言物語』の歳時と地理
大久保　順子　　「公事は破ずに勝」小論
空井　伸一　　『西鶴諸国はなし』巻一の二 ―決定不可能性としての〈不思議〉―
赤間　亜生　　鏡花小説のヒロイズム
―『風流線』『続風流線』における反転の論理―
押野　武志　　堀辰雄『水族館』論 ―都市・欲望・身体―

■第１８・１９合併号　　平成３年１１月発行
頼　振南　　『落窪物語』における「貴種流離譚」の構造
堀　淳一　　老いへのうつろい ―玉鬘が剔出する光源氏の頽齢―
深澤　昌夫　　「物語」の行方
―『今昔物語集』、『日本霊異記』における「乞食迫害現報譚」をめぐって―
伊狩　弘　　『ある女の生涯』論 ―狂気の内と外―

押野　武志　　〈子どもの死〉をめぐる隠喩 ―賢治童話を中心に―
原田　香織　　『卒塔婆小町』論―三島由紀夫と能楽―

■第１６・１７合併号　　平成元年７月発行

原田　香織　　『班女』考 ―三島由紀夫と能楽―
虫明　美喜　　立原道造の音楽 ―口語自由詩における可能性―
伊狩　弘　　『春』新考 ―旅の原点をめぐって―
平林　香織　　「姥が火」伝説からの乖離
　　―『西鶴諸国はなし』巻五の六「身を捨て油壺」―
佐倉　由泰　　『平家物語』における源義経 ―〈制度〉とのかかわりに着目して―

■第１５号　　昭和６１年１１月発行

佐倉　由泰　　『平家物語』における平重盛像の考察
　　―物語における機能と文芸的意義をめぐって―
佐野　正人　　建保期定家歌の一様相 ―『百人一首』自撰歌をめぐって―
原田　香織　　光を花と散らすよそほひ ―幻視の世界『融』―
本田　香織　　『日本永代蔵』の表現 ―巻一の三「浪風静に神通丸」をめぐって―
中村　三春　　有島武郎『迷路』における相対化の原理
寺沢　浩樹　　〔書評〕日本文学研究資料刊行会編『有島武郎』

■第１４号　　昭和５９年１２月発行

佐藤　晃　　説話文学における霊鬼と空間
高橋　清隆　　『宇治拾遺物語』冒頭話の「ことほぎ」と「もどき」
紙　宏行　　『無名抄』論（二）―「理」の歌論―
寺沢　浩樹　　「人間万歳」の世界―人類調和の願い―
堀　竜一　　初期福永武彦のモティーフ連関に関する一試論

■第１２・１３合併号　　昭和５８年７月発行

渡辺　仁史　　須磨流謫
　　―『源氏物語』第一部における光源氏の精神的転回点について―
福田　景道　　『大鏡』における藤原忠平の栄華
高橋　清隆　　『大鏡』の構造
紙　宏行　　『無名抄』論（一）―構成と成立―
石川　秀巳　　八犬士列伝の構想 ―『南総里見八犬伝』ノート（三）―
中村　三春　　「かんかん虫」の印象主義的造形

大沢　正善　　「鼻」論 ―滑稽小説としての可能性とその変容―

■第１１号　　昭和５６年１１月発行

山田　吉郎　　川端文学と浮舟
石川　秀巳　　発端部の世界と「因果の理法」―『南総里見八犬伝』ノート（二）―
呉羽　長　　東北大学附属図書館所蔵『花鳥余情』について
熊谷　義隆　　「花宴」の回想の意味 ―『源氏物語』の王権継承の軌道を敷くもの―
小島　雪子　　「少女」巻、玉鬘十帖の夕霧像 ―『源氏物語』世界の相対化の過程―
リン・Ｋ・ミヤケ　『多武峯少将物語』における「山」のイメージ

■第１０号　　昭和５５年６月発行

伊藤　守幸　　『更級日記』の夢 ―作者の精神史の一側面―
二瓶　浩明　　「好色本」の成立（下）―『好色一代男』、「好色」とそのあり方―
石川　秀巳　　「義死と救済」のモチーフ ―『南総里見八犬伝』ノート（一）―
佐藤　伸宏　　中原中也とポール・ヴェルレーヌ
熊谷　義隆　　継承の構図 ―『細雪』と『源氏物語』の関係をめぐる試論―
山田　吉郎　　『山の音』における夢
呉羽　長　　東北大学附属図書館所蔵『源氏物語註』について

■第９号　　昭和５４年６月発行

呉羽　長　　物語の閉塞 ―『源氏物語』「浮舟」巻試論―
二瓶　浩明　　「好色本」の成立（上）―「好色一代男」の出現―
加藤　二郎　　漱石研究史概観 ―その様々なる意匠―
荒　暁子　　古典受容の方法について
　　―「もののあはれ」と日本浪漫派を中心として―
佐藤　伸宏　　「朝の歌」の成立 ―中原中也におけるランボオ体験をめぐって―
伊藤　守幸　　石川淳における「野性」の意味 ―柳田国男との影響関係を通して―
山田　吉郎　　『雪国』小論 ―島村像をめぐって―

■第８号　　昭和５３年１２月発行

荒　暁子　　紫上における二つの「理想性」とその接点
呉羽　長　　宇治十帖橋姫物語の構造 ―作者の絶望の二重性を起点に―
石坂　妙子　　『蜻蛉日記』の独詠歌 ―その意義に関する一試論―
伊藤　守幸　　幻想と現実 ―『更級日記』試論―
檜垣　孝　　俊成における住吉信仰

佐々木　和子　　高村光太郎における「自然」―『道程』から『猛獣篇』まで―
加藤　二郎　　亡国の士 ―漱石と「近代」―

■第７号　　昭和５２年３月発行

先田　進　　三島由紀夫とオスカー・ワイルド
　　―習作期におけるワイルド受容について―
橋浦　洋志　　朔太郎の「さびしい」光学
加藤　二郎　　漱石と良寛
長谷川　隆　　『平家物語』における俊寛と成経
檜垣　孝　　俊成の『万葉集』受容について
呉羽　長　　紫上における苦の超克
荒　暁子　　道綱母における夢の回復 ―『蜻蛉日記』上巻の兼家像を通して―

■第６号　　昭和５０年３月発行

三塚　貴　　堀辰雄『美しい村』の構成
渡辺　善雄　　森鴎外と平出修 ―「フアスチエス」と小説「都会」裁判―
橋浦　史一　　『破戒』論 ―主題と評価―
阿部　武彦　　俳人としての会津八一
錦　仁　　藤原定家の本歌取 ―「寛平以往」の実践的意味―

■第５号　　昭和４９年２月発行

福井　幸子　　寂然における詠歌の意義
阿部　武彦　　式子内親王試論
橋浦　史一　　『嵐』論 ―「嵐」の意味―
坂野　信彦　　文芸研究の方法論的基礎

■第４号　　昭和４７年９月発行

佐々木　民夫　　片歌形式歌謡と問答歌
三塚　貴　　自傷 ―有馬皇子の歌の題詞の意味―
勝倉　壽一　　「浅茅が宿」の主題に関する試論 ―宮木の死の意味をめぐって―
清田　文武　　『小説神髄』における馬琴の投影
北条　常久　　芥川の文芸時評についての覚え書き
大野　節子　　堀辰雄『菜穂子』試論 ―『源氏物語』若菜の巻との関連について―

■第３号　　昭和４５年６月発行

工藤　進思郎　　『源氏物語』蜻蛉の巻についての一試論 ―今上の女一宮をめぐって―

高橋　洋子　　『今昔物語集』本朝仏法部における女性に関する説話
―その類型と女人の罪とをめぐって―

西沢　正二　　『増鏡』に関する一試論 ―後醍醐帝の物語をめぐって―

佐々木　浩　　藤村におけるイプセンへの関心

山口　澄江　　芥川龍之介『往生絵巻』論

アドリエン・ブラドニー　　西行の恋の歌

■第２号　　昭和４３年７月発行

中西　千代子　　『源氏物語』における人物描写と自然 ―六条院の園をめぐって―

生田　勝彦　　宗砌の作風についての一考察

清田　文武　　鴎外における小倉時代の意義 ―『易』との関係を中心に―

佐々木　靖章　　有島武郎の作家としての自覚 ―『有島武郎著作集』を中心にして―

■第１号　　昭和４２年８月発行

鈴木　則郎　　『将門記』と『陸奥話記』

西田　禎元　　『平中物語』の世界 ―その滑稽譚的要素―

工藤　進思郎　　浮舟の物語における右近 ―その二人説への疑問―

西村　真一　　西行における源俊頼の影響

高橋　洋子　　『宇治拾遺物語』の一特色
―『古本説話集』の和歌説話との比較を中心として―

西沢　正二　　『増鏡』に描かれた後鳥羽院

佐々木　浩　　藤村における散文への志向